

Validation of masticatory function and related factors in maxillectomy patients based on the concept of “oral hypofunction”: A retrospective cross-sectional study

藤川, 夏恵

<https://hdl.handle.net/2324/4475043>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (歯学) , 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)



(様式3)

氏 名 : 藤 川 夏 恵

論 文 名 : Validation of masticatory function and related factors in maxillectomy patients based on the concept of “oral hypofunction”: A retrospective cross-sectional study

(「口腔機能低下」の概念に基づく上顎切除患者の咀嚼機能および関連因子の検証：後ろ向き横断研究)

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

目的：上顎切除患者の口腔機能はさまざまな方法で評価されてきたが、その評価は、基準が存在せず依然として困難である。本研究の目的は、「口腔機能低下症」の概念に従って、上顎切除患者の咀嚼機能、最大咬合力（MOF）、および最大舌圧（MTP）を客観的に評価し、咀嚼機能と関連する因子を検証することとした。

方法：顎義歯を使用している上顎切除患者 50 人（男性 23 人、女性 27 人：年齢の中央値＝72 歳、四分位範囲（IQR）＝63.75～77 歳）を対象とし、「口腔機能低下症」の診断基準に従い、咀嚼機能、MOF、および MTP の検査値と患者因子（年齢、咬合支持数、および上顎欠損の分布）を診療情報記録より抽出した。

「口腔機能低下症」の基準値を超えた患者数と、咀嚼機能、MOF、および MTP に対する咬合支持数および上顎欠損の分布の影響を解析した。また、咀嚼機能と他の因子との関連を評価するために、重回帰分析を行なった。

結果：咀嚼機能の中央値（114 mg/dL、IQR：73-167.5）は「口腔機能低下症」の基準値を超えたが、MOF（229.2 N、IQR：110.2-419.6）および MTP（25.9 kPa、IQR：21.4-29.0）は超えなかった。各口腔機能の基準値を超えた患者数は、それぞれ 27 人（咀嚼機能）、8 人（MOF）、12 人（MTP）であった。それぞれの口腔機能において、咬合支持数は統計的に有意に影響していたが、上顎欠損の分布は影響しなかった。さらに重回帰分析により、MOF は咀嚼機能と強く関連していることが明らかになった（ $P = 0.042$ ）。

結論：本研究では、患者数が少数であるためにその結果には制限があるものの、上顎切除患者の咀嚼機能の中央値は「口腔機能低下症」の基準値を上回ることができ、MOF は咀嚼機能に影響する因子である可能性が明らかとなった。